

フォーラム2日目

ていだん 鼎談

会場：元北小学校体育館

上流文化圏川根本町の大きな可能性。

この地域はどんな魅力や可能性を秘めているのか、また、解決すべき課題は何か。これから何が必要となるのか。膝をつき合わせ徹底討論していただきました。

コーディネーター・藤井経三郎さん
— 今回の鼎談では奥大井また川根本町が持つ魅力や可能性について、皆さんご意見を聞かせていただきませす。まずは、この地域にはどんな価値や、どんな魅力があると思うか、それぞれお聞かせください。—

ら、あつという間に何人も親戚という方がいらしたんですね。もう何十年も前の話なのに、これはすごいことですよ。この町には密接な人間関係と豊かな自然環境がある。そして、ここにはもてなしの心がある。これが一番の魅力だと思います。

菅尾敬子さん
私の祖母はかつて川根本町の徳山に住んでいたことがありまして、私は外の人間ですが、川根のお茶はずっと欠かさず飲んでいました。昨夜こちらに来て、もしかしたら私の祖母を知っている方がいるかなと思いつつ、参加者の方々に話を聞いた

杉山嘉英町長
都会での仕事は、言ってみればいくらでも人間の替えがきく。山村では、いわゆる生業というのか、この人でなければ、というのがあり。人間の暮らしの原点だと思えます。自然の中で恵みや、ときには災いを受けながら生きる。社会の中で個人が個

人として認められている。これが本町の社会といえるのではないのでしょうか。外部からの評価でしか自分を計れない都市の生活では分からないことだと思えます。

全国的に過疎が進む中、人口の少ない町では、外からの人材が果たす役割というものは大きいものがあります。私は「助成金より助成人」と言っているんですが、外からの人間が果たす役割についてどうお考えですか。——

竹内宏さん
まず、農業というものは農業そのものよりも、販路の拡大とか、人材の効率的な確保とか、マーケティングなんか非常に重要で、様々な知恵を集約すればぐんと伸びる余地があるということですね。ある農業者は、銀行員から農家に転身して、これまでの会社勤めで培った人材や知識などを活かして経営したら、周辺の農家の倍ぐらいうけたと。そして農業以外の知識を周辺の農家に教えてあげたんです。ですから、外からの情報が元からある情報と集合す

ると、その地域はさらに伸びる可能性があるとということなんです。

— 今、寸又峡では、「日本一清楚な温泉保養地づくり」というのを進めているんですけども、これから川根本町は、どんな魅力をつくっていったら良いか、人を引きつける力を持つにはどうしたら良いかという点についてはいかがですか。——

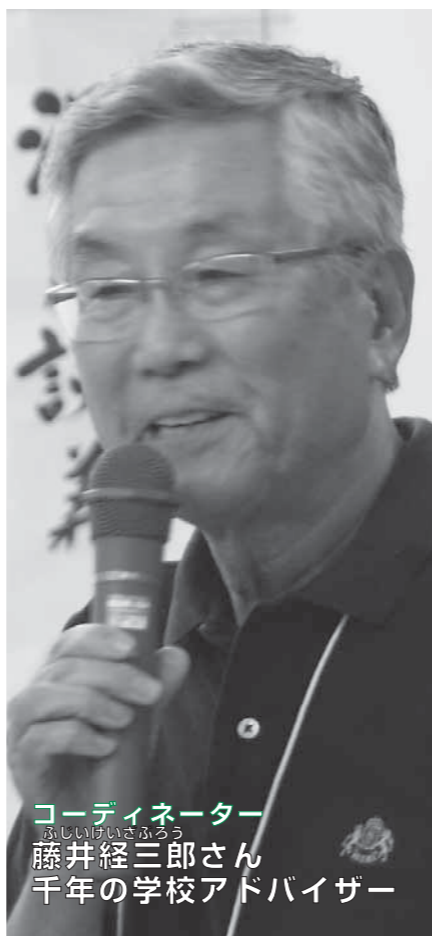
菅尾敬子さん
私たちテレビの世界も同様なんです。どうやったら視聴者に見てもらえるか、観光客に来てもらえるかということだと思えます。ただ知名度があるのかということですね。川根本町はお茶やSL、寸又峡など多くの資源を持っていますが、どれだけ知られているでしょうか。例えば、川根茶を使った洋菓子コンテストを、一流の菓子職人を呼んで大々的にやって名前を売るなんてどうでしょう。私は川根茶を自信を持って周りに勧めることができます。もっと話題づくりなど、全国に向けてPRしてほしいですね。



菅尾敬子さん
日本テレビ総務局 IR部長



竹内宏さん
静岡総合研究機構 理事長



コーディネーター
藤井経三郎さん
千年の学校アドバイザー



杉山嘉英
静岡県榛原郡川根本町町長

杉山嘉英町長

この地域を考えたとき、何を伝えられるかといえば「安らぎ」だと思います。我々にはおらかな気持ちがある。去年の知識も10年前の知識も同様に活かすことができ。年月を経ることが知識は積み重なり、歳をとることがプラスに感じられる。循環していくことが安心感を生む。川根に行けば安心できる、ゆったりできると言われるような町でありたいですね。

竹内宏さん

ここで千年の学校とか上流圏構想とかの話聞きながら、車座になって美しい山並みを眺めながら話ができる。これ自体が素晴らしいと感じます。今、世界は緑茶ブームですよ。各国を渡り歩くと、たいがいの国で日本食があつて緑茶と出会う。ただ、残念なことに中国茶なんですね。静岡は有名な産地なのに、どうも外に打って出てやろうという気持ちに欠けるんじゃないかと思えます。川根茶はうまいという考えもここだから成り立つのであつて、外でも同じ考えとは限りませんよ。常識

を常識と捉えず、地元じゃなくて世界の人においしく飲んでもらうにはどうしたら良いか考えたいですね。

菅尾敬子さん

川根茶を買ってもらうためには、商品開発する人や商売をしている人の知識とかも必要で、そういう人を集めて千年の学校でシンポジウムをやればいいのではないのでしょうか。お茶で世界に打って出てやろうという人たちがどういう観点でお茶を考えているのか。ここに呼んで議論したらと思うんです。

— 生産者だけでなく、販売者も顔を合わせようというところに大きなヒントがあるような気がしますね。そこに消費する人が加わって大きな会議ができればと思いますが。——

杉山嘉英町長

お茶に関して言えば、ようやく川根地域全体を巻き込んだ川根お茶街道推進協議会という幅広い分野の人が入った組織もできましたので、これらを通じて交流を深めていきたいと考えます。

竹内宏さん

そして、この町でうんときれいな風景はお茶畑ですよ。この美しさをどう活用していきますか。

杉山嘉英町長

昨年の全国イベントで、本町に訪れた方々が「お茶畑ついでいいですね」と言ってくれます。しかし、ここに住んでいる人は、そんなこと考えないんですね。生活のためのお茶ですから景観という意識がない。ぜひ地域の方々に、「景観」というのも活性化のための大きな資源であると感じてもらいたいですね。

— それでは、上流文化圏として川根本町は何を誇るべきか、皆さんの考えをお聞かせください。——

杉山嘉英町長

昔から受け継がれてきた生活空間や豊かな自然環境、景観ですね。それをどう守っていくか、ここでの暮らしそのものが文化であると伝えていきたい。外に向けてもそうですが、特に次の世代にこそ伝えていきたいと感じています。

菅尾敬子さん

最終的には、ここに住んでいる方々がどういう町を望むのか、どういう暮らしをしたいのかということですが、お金の豊かさを追いかけては、豊かさを追いかけていただけではないと思います。

— 1999年に開催された上流文化圏会議（会場：川根本町）に参加した子どもたちが今、20歳前後となり、海外に出るなど前向きに社会を歩んでいます。今の子どもたちが10年後の川根本町をどう想像し、これからどんな町をつくらせていくのか。そのためには、まず大人がしっかりとこの町で誇りを持って生きる姿を子どもたちに示す。これが大きな課題ではないでしょうか。川根本町の次世代の成長を楽しみにしたいと思います。本日はありがとうございます。——

